

日本語教科書に見られる調整行動のディスコース分析

桑原 直子

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2012年10月1日 受理)

はじめに

日本語を習い始めて間もない留学生は限られた語彙や文法を使い、必死に日本語で会話を行おうとする。その際には、話す相手と語彙や、ニュアンスの調整をし、互いに理解し合おうとする姿勢が不可欠である。では、このような調整行動は教科書の中に見られるのであろうか。

本稿では本学留学生別科で使用することを目的とした日本語教科書の作成にむけ、会話表現を提示する際に、既刊の日本語教科書ではどのような調整行動が取り入れられ、どのようにディスコースがなされているのかを、調査、分析することとする。

1. 調査目的及び調査対象教科書

目的：

日本語母語話者と非母語話者の教科書に提示された接触場面における調整行動に注目し、そこでみられる特徴を明らかにする。

調査対象教科書：

『COMMUNICATING IN JAPANESE』 -コミュニケーションのための日本語入門-

『みんなの日本語 初級Ⅰ』『みんなの日本語 初級Ⅱ』（会話部分）

『日本語90日1』『日本語90日2』『日本語90日3』（会話部分）

2. 分析の枠組み

今回の分析の枠組みには宮崎（2003）を用いることとする。宮崎（2002）では調整行動を以下のように分類している。まず、調整が連続的におこなわれたものとそうでないものを、「単純調整」（一回だけの調整に基づく）と「複合調整」（連続した調整行動）と呼ぶ。また、調整行動を行う参加者のタイプからの分類として、「聞き手が不適切さをマークし話し手が調整を行う」「自己調整」と「話し手が不適切さをマークし聞き手に調整を要求する」「他者調整」に分けられる。前者には、「相手の発話を理解するための他者マーク自己調整」、「話し手自身が不適切さをマークし、調整のデザインを行う発話の過程で現れる、自己マーク自己調整」があり、後者には、「話し手が不適切さをマークし、聞き手に調整を要求する、

自己マーク他者調整」、「話し手が調整行動に全く参加しない他者マーク他者調整」がある。さらに、これらの調整軌道の下位分類として、不適切な問題が生じた場合でも、発話者も聞き手も調整を行わない「他者マーク無調整」「自己マーク無調整」がある。最後に、「3人以上が調整行動に参加する」調整を「マルチ参加者間調整」と呼ぶ。また、調整行動における「聞き返し」の発話意図として、尾崎（1993）の「反復要求」「聞き取り確認要求」「説明要求」「理解確認要求」「反復説明要求」という枠組みを用いた。

3. 教科書にみられる調整行動の例

調査対象教科書に現れた調整行動は以下のようなものである。ここに調整行動のデザイン、調整タイプとその例を挙げる。

① 調整デザイン：単純調整・複合調整

調整タイプ：他者マーク自己調整・他者マーク他者調整

- | | | |
|----|--|--|
| 1 | A：失礼ですが、お名前は…。 | |
| 2 | B：私ですか。 ・・・・他者マーク | |
| 3 | A：はい。 ・・・・自己調整 | |
| 4 | B：ダンです。 | |
| 5 | A：ダンさんは大学院の学生ですか。 | |
| 6 | B：いいえ、違います。三年生です。 | |
| 7 | A：はっ？何年生ですか。三年生ですか。 ・・・・他者マーク他者調整 | |
| 8 | B：ええ、そうです。 | |
| 9 | A：出身は？ | |
| 10 | B：ニューアークです。 | |
| 11 | A：はっ？どこですか。ニューヨークですか。 ・・・・他者マーク | |
| 12 | B：いえいえ。ニューアークです。 ・・・・自己調整 | |
| 13 | A：ああ、そうですか。わかりました。専門は何ですか。 | |
| 14 | B：人類学です。 | |
| 15 | A：はっ？何ですか？ ・・・・他者マーク 1 | |
| 16 | B：人類学です。 ・・・・自己調整 1 | |
| 17 | A：人類学は英語で何といいますか。 ・・・・他者マーク 2 | |
| 18 | B：anthropology です。 ・・・・自己調整 2 | |
| 19 | A：ああ、そうですか。わかりました。 | |

『COMMUNICATING IN JAPANESE』 LESSON2 会話 pp.10

② 調整デザイン：単純調整

調整タイプ：他者マーク自己調整

- | | | |
|---|---------------------------------|--|
| 1 | A：これはわたしが作ったんですよ。 | |
| 2 | B：えっ、ほんとうですか。 ・・・・他者マーク | |
| 3 | A：ええ。日曜大工が趣味なんです。 ・・・・自己調整 | |

『みんなの日本語 初級Ⅱ pp.11』

③ 調整デザイン：単純調整

調整タイプ：他者マーク無調整

- 1 A：勝先生、日本語は一年勉強したら、自由に話せますか。
- 2 B：一年？無理でしょうね、一年じゃ。・・・他者マーク無調整

『COMMUNICATING IN JAPANESE』 LESSON 19 会話 pp.23』

④ 調整デザイン：単純調整

調整タイプ：他者マーク自己調整（母語を使用する調整）

- 1 A：先生、私今夜バスケットボールの試合があるんですが出られるでしょうか。
- 2 B：とんでもない。君の結婚式だって、出席させるわけにはいきませんよ。
- 3 A：とっても大事な試合なんで、是非行かせてください、先生。おねがいします。
- 4 B：君、いいですか。君は今熱が高いだけじゃなくて、肺炎になりそうなんですよ。
- 5 A：肺炎というのは、先生、英語で何というんですか。・・・他者マーク
- 6 B：Pneumonia です。死にたくなかったら、今夜の試合は諦めなさい。・・・自己調整

『COMMUNICATING IN JAPANESE』 LESSON 31 会話 pp.406

⑤ 調整デザイン：単純調整

調整タイプ：自己マーク無調整

- 1 A：パクさん。この漢字の読み方がわかりますか。
- 2 B：どの漢字ですか。ああ、これ？う～ん、わかりません。・・・自己マーク

『日本語 90 日 1 pp.139』

⑥ 調整デザイン：複合調整

調整タイプ：自己マーク自己調整

- 1 A：かぜをひいたんですか。
- 2 B：ええ。
- 3 A：薬は？薬を飲んだんですか。・・・自己マーク 自己調整
- 4 B：いいえ。
- 5 A：熱は？熱があるんですか。・・・自己マーク 自己調整
- 6 B：さあ。

『日本語 90 日 2 pp.71』

4. 教科書にみられる調整行動のディスコース調査結果

以上の例に示すように、調査対象教科書のなかには6種類の調整がみられた。

①は『COMMUNICATING IN JAPANESE』のレッスン2に提示されたディスコースである。この課では、「はっ？」という「反復説明要求」が「ことばの使い方」として取り上げられ、学習項目として扱われており、上記はその応用に考えられたディスコースであることが伺える。「はっ？」の説明として筆者は、「話しての発話に対し、聞き手が聞き取れなかった、理解できなかったことを示す。よく聞き取れなかった場合には、この表現はとても役立つ。(P13)」ことをあげている。ここでは「はっ？」を単独で用いるのではなく、「はっ？」に続き、「何年生ですか?」「どこですか?」という明確な問い(「説明要求」)

をすることで、調整をスムーズに行わせる意図が見られる。また、L17・18にみられるのは、理解できなかった語を母語へ置き換えるという調整である。これも、「ことばの使い方」で取り上げられたひとつの学習項目となっている。

②は『みんなの日本語 初級Ⅱ』27課に提示されたディスコースである。この課では上述した「はっ」にかわり、「えっ」という「反復説明要求」の後、「ほんとうですか」という「説明要求」が行われている。

③では「日本語は一年勉強したら」というAに対し、Bは「一年？」と上昇アクセントを用いて「聞き取り確認要求」をしている場面である。その後特に話し手にも聞き手にも調整はみられない。

④では、4Bの「肺炎」という語彙が引き金となり調整行動を導いている。「説明要求」をするにあたり、5Aでは、母語でなんとと言うのかという要求の方法を取っている。それに応じ、6Bで「Pneumonia」と母語にて「説明」している。

⑤では一度「どの漢字ですか。」と問いかけた後、「ああ、これ？」と自己調整を行っているが、その後の調整はみられない。

⑥では「薬は」と一度聞いた後、理解しやすいように「薬を飲んだんですか」と文章で聞き返し自己調整を行っている。

教科書別にみていくと、『みんなの日本語』では、「えっ」という聞き返しを用い、反復説明要求を行うディスコースのみ、調整行動がみられた。『日本語90日』で多かったのも、やはり、「えっ」という聞き返しを用いた、反復説明要求及びそれに伴う説明要求であったが、「あたらし店?」「何料理?」というように語尾を挙げて、上昇アクセントで発言される、エコー型の「反復確認要求」も多々みられた。

『COMMUNICATING IN JAPANESE』では言葉の使い方として、「はっ」という反復説明要求が取り上げられており、その課でこの調整行動を繰り返し学習するようデザインされていた。

また、2冊の総合型教科書の会話提示部分に現れた調整行動は以下のようであった。

	みんなの日本語 I II	日本語90日 1, 2, 3
他者マーク他者調整	0%	4%
他者マーク自己調整	100%	75%
他者マーク無調整	0%	4%
自己マーク他者調整	0%	0%
自己マーク自己調整	0%	8%
自己マーク無調整	0%	8%

5. 分析と今後の課題

今回調査した教科書においてみられた特徴の一つは、「えっ?」あるいは、「はっ?」という「反復説明要求」を早い課で導入している、またはこのタイプの調整行動が会話の中

で多用されているということである。この「聞き返し」は、課を越えて会話の中で何度も提示されており、その定着を図っていくよう作成された意図がみられる。また、「反復説明要求」をした後で、すぐに「説明要求」をするというケースが全ての場合に取られていたことも特徴的である。尾崎(1998)では、「反復要求」か「説明要求」かがあいまいな「聞き返し」は母語話者から「反復」を引き出す可能性がかなりあり、それが「聞き返し」連鎖につながるケースが多い」ことを指摘しているが、日本語の初級教科書においては「反復説明要求」をした後、明確な応答を求めべく「説明要求」であるということとを前面に出すことで、聞き返しの連鎖をさけることができる提示となっていることがわかった。しかし、「はっ?」または、「えっ?」という語は使用場面、待遇レベルにより、多少ぞんざいな言い方であると認識される場合が予想される。以上のことより、この「はっ?」「えっ?」という聞き返しの方法を初級教科書で提示する場合には、①相手へのより明確な問いを続ける、②待遇レベルに注意するという注意が必要であると思われる。

『COMMUNICATING IN JAPANESE』では母語の語彙への置き換えの方法も早い段階で取り上げられていたが、その他の教科書ではこのような調整が見られなかった。会話の中で理解できない言葉を母語に置き換えるという「説明要求」をすることは、特に初級の学習者がコミュニケーションを取るうえで早い段階で習得しておけば、非常に役に立つ項目であり、実際の会話場面でもしばしば現れる。今後、初級を対象とした会話教材を作成するにあたっては、学習事項として母語への置き換えを要求する調整行動も早い段階で含んで行く必要があると思われる。

最後に、今回の調査教科書でみられた調整デザインは「単純調整」、調整タイプは「他者マーク自己調整」が87%を占めており、「自己調整」を提示したものは13%にとどまっている。宮崎(2003)で提示されているようにこの他のタイプの調整行動があることを考慮すると、教科書の中でワンパターンの調整行動のみを提示することには問題があるといえるだろう。例えば、教室での教師と学生の会話を基にしたフォーリナートークなどが提示されてもいいはずである。母語話者と非母語話者の会話では、御館(1998)で述べられているように、「談話の開始時に外国人生を認識」するものであり、一旦は文法性が遮断されつつも、対話者の理解度の認識によりそれが徐々に解消され、会話が成立していくものである。そういったモデル会話を初級教科書に含んでいくことは、学習者の情意フィルターを低くし、学習の向上をもたらすであろう。

学習者がどのような場面においても調整行動をスムーズに行えるようにするためには、様々なタイプの調整行動が教科書で見られるべきであり、教科書作成に向けて、実生活の接触場面での調整行動に注目し、教科書内の会話部分では提示されずにいるが、学生の生活実態からは導入が必要であると考えられる調整行動とは何なのかを明らかにし、より多くのタイプの調整行動を、会話練習として教科書に組み込んでいけるよう調査を進めることを今後の課題としたい。

参考文献

- 宮崎里司 (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号
- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー - 「聞き返し」の発話交換をめぐって」『日本語教育』81号
- 御館久里恵 (1998) 「日本語母語話者の接触場面におけるフォーリナートークの諸相」『大阪大学日本学報』17号
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』
- 星野恵子他 (2000) 『日本語90日1』『日本語90日2』『日本語90日3』ユニコム
- 能登博義 (1992) 『COMMUNICATING IN JAPANESE』創拓社

An Analysis of the Discourse of Adjustment Behaviour in Beginners Level Textbooks of Japanese as a Foreign Language

Naoko KUWAHARA

Course in Japanese Studies for Students from Overseas,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2012)

In this paper, I analysed communication strategies which appear in the Japanese textbooks for the beginners' level. I used Miyazaki (2003) to categorize the communication strategies and analysed how each works in language education.

Six different types of communication strategies appeared in the textbooks. Most commonly used were 'ha?' or 'e?' to repeatedly request explanations. It was characteristic of the sequence of utterances in these discourses that repeated questions always followed 'ha?' or 'e?'

Although six different types appeared, 87% of discourses contain the same communication strategy. Since Miyazaki (2003) points out that more types exist, it is necessary to investigate learners' conversations and analyse what more types of communication strategies need to be introduced in the beginners' level textbooks.